

本科 1 期 6 月度

解答

Z会東大進学教室

高 2 選抜東大英語

高 2 東大英語



## 8章 形容詞・形容詞句・形容詞節

### 問題

#### 【1】

A.

##### 全訳

たとえ今日では本当にきれいな空気を手に入れることはほとんど不可能だとしても、私たちはできるだけきれいな空気がある状況に自分自身を置くことは確かにできる。私たちが何をしようと、どこへ行こうと、可能ななかぎり一番いい空気が手に入るという保証はないが、戸外、それも文明から最も離れた空気が、提供される一番いい空気だということを理解するのに、大した時間はかかるない。

B.

##### 全訳

私は徹底した調査を行なった。そして私が集めた史実に基づいて、戦争の無意味さを考えることを日本の読者に訴える小説を書いた。

C.

##### 全訳

そう考えると私はすっかり気持ちよくなり、うれしくなった。そして少しづつ目を閉じていって、ついに今まで経験した中で最も心地よい眠りに陥っていった。

D.

##### 全訳

④人の一生には大きな波が突然襲ってきて、ぼうっとした意識を取り戻せないうちに通りすぎてしまい、気がついたときには周囲一帯の水は再び穏やかになっていることが時々ある。

また、避けることができない瞬間に備えて背筋を緊張させっぱなしの状態で、一生とも思えるほどの長い間、あれこれと思い悩むこともある。それが来る前の全ての時間は暗くなり、それが落とすしつこい影のために全ての光は薄れてしまう。⑤しかし、やがてその瞬間がいいよやって来るときには、我々はそれを無関心に迎える。いや、ホッとすると言ってもよいくらいである。それがついに現実となっているからである。

#### 【2】

##### 解答例

人間は歴史的に動物と自らを区別することに关心を抱いてきた。その第1の区別方法は、人間だけが互いに争うという欠点があるというもので、それは人間に対して道徳的教訓を導くためになされた区別であった。区別方法の第2は、人間の方が知的で優れていることを主張するものであり、その目的もまた、教訓を導き出すためのものであった。(156字)

## 解説

大意要約問題に頻出する「人間と動物の対比」をテーマとする文章である。2000年東大前期にもこのテーマの要約問題が出題された。大意要約問題を解答する際には、1文1文の理解は言うまでもないことがだが、それに加えて、英文全体の論理展開を把握できるように、英語の論理展開を示す言葉や、英文中で一定の機能を持つ表現に習熟することが大切である。

本問の場合のこうした表現は、

- ① 疑問文
- ② First, the other

である。

要約問題中の疑問文は、それに対する答えを求めているわけではなく、著者が問題を設定しているのであるから、英文全体のテーマや main idea が含まれていることが多い。また、first, second, one, the other などは、英文の構造を明確にするいわゆる discourse markers である。

本文の第1段落の最後の2文、Why do we humans so frequently define ourselves by distinction from animals? Why should the distinction between man and beasts matter? は疑問文であり、この中に本文の主要なテーマの1つが含まれていると考える。また、第2段落の第2文の冒頭の First, 第3段落の冒頭、The other … category はそれらの主要テーマについて大事なポイントが2つ挙げられている。

それでは具体的に見てみることにしよう。本文の各文を箇条書きにしてみると、以下のようになる。(( )) の番号は文の番号を表す。)

### 《第1段落》

- (1) 歴史的に人間と動物の区別に関心あり
- (2) 人間の特徴
- (3) 動物の特徴
- (4) 人間と動物の区別：何らかの必要性 + 機能
- (5) 人間と動物を区別する理由は？
- (6) = (5)

### 《第2段落》

- (7) この区別には2種類
- (8) 第1の区別：人間だけが互いに戦う（人間<動物）
- (9) → 道徳的な解決策を求める
- (10) (具体例1)
- (11) (具体例1)
- (12) (具体例2)
- (13) (具体例3)
- (14) (具体例3)
- (15) 動物は観察されず、人間に対する警告
- (16) = (9)

### 《第3段落》

- (17) 第2の区別：人間が動物より優れている（人間>動物）
- (18) （具体例1）
- (19) （具体例2）
- (20) 人間>動物
- (21) → 教訓的な点を主張するため

第2段落、第3段落の展開から見て、この文章のテーマは「人間は歴史的に動物と自らを区別することを行ってきており、それには目的があった」ということがつかめよう。したがって、このテーマに沿って主要なポイントを拾い上げるとよい。

第1段落は、第1文、第4文、第5文を中心にまとめるといい。その他の文は、それぞれ先行する文の言い換えの文だからである。

第2段落は、人間と動物の区別には2種類あり、その第1の区別に関して述べている。第10文から第14文までは、先行する文の内容の言い換えや具体例であるから、要約文には入れる余裕がない。ここで忘れてならないのは、第1段落の最後の部分の疑問文によって設定されているテーマに対する解答、すなわち、動物と人間の区別の目的は何かということに関する答えである。それは第9文に含まれている。そこで、この段落は第7文、第8文、第9文を中心にまとめるといい。

第3段落は、2つ目の区別とその目的であるから、第2段落と同じような方針でまとめる。ここでは、第17文と第21文を中心に要約するとよいだろう。

#### 全訳

人は昔から、自分たちと動物を区別するのに熱心だった。私たち人間は話をする。筋道を立てて物事を考え、想像を使い、期待し、崇拝し、そして笑う。動物はどれも一切しない。人間と他の動物の間には、埋めようのないそれだけの大きな差があるのだ——こうした主張が歴史上数多くなってきたのは、多分その主張が何かに必要か、あるいは何らかの役割を果たすものだったからであろう。なぜ私たち人間は、ことあるごとに、自分たちと動物との違いを強調したがるのか。そうした区別が、なぜ重要なのか。

区別をしようとする時、その方法は大きく2種類に分かれる。まずよく見られるのは、人間の欠点を他には例がないものとして引き合いに出し、その最たるもののは仲間同士で戦うものだとする考え方。このように主張する書き手は、読み手に道德観を吹き込もうとしている場合が多い。紀元1世紀、博物学者の大プリニウスは『博物誌』の中でこう論じている。「ライオン同志が争うことはない。ヘビも仲間のヘビに攻撃を仕掛けたりはしないし、大海原の怪物も同種相手に猛り狂うことはない。ところが、人間の不幸のほとんどは同じ人間によってもたらされたものである。」(ルネッサンスの詩人) ルドヴィーコ・アリオストは1532年、『オルランド狂乱』の中で、「仲間を傷つける動物は人間だけだ。」と書いているが、これも戒めの言葉と言えるだろう。さらに1886年、(イギリスの歴史家) ジェームズ・フルードは『オセアナ』で、「野生動物は楽しみのために相手を殺したりはしない。仲間の苦痛や死を面白がるのは人間だけだ。」と主張している。これらの例では、動物はあまり観察の対象とはなっておらず、人間は(主として)他の人間を殺すのをやめるべきだという忠告が要になっている。恥を知れ、人間の行いは動物以下だぞ、と気付かせようとしているわけだ。

もう1つの方法は、これとは正反対に人間の利点——知性や文化、ユーモア感覚や死の認識など——を引き合いにして動物と比較しようというもの。19世紀(イギリスの批評家)ウイリアム・ハズリットの考えはこうだった。——「笑ったり泣いたりする生き物は人間だけ——つまり、物事の現実とあるべき姿の違いがわかる動物は人間だけである。」そして今世紀、哲学者ウイリアム・アーネスト・ホッキングはこう主張している。——「死について考え、また自らの最期にいくらかでも不安を示す動物は人間だけである。」ユーモアがあり、徳を理解し、道具を作ったり使ったりする力があるから、人間は特別だとする見方。ここでもまた書き手たちは人間相手に教訓をたれるだけで、動物の観察や理解にはほとんど注意を払っていない。

**注**

- ℓ. 1 ◇ be concerned with ~ 「～に関心を抱く」  
◇ distinguish ~ from … 「～と…を区別する」
- ℓ. 6 ◇ matter *vi.* 「重要である」
- ℓ. 7 ◇ fall in (into) ~ 「～に分かれる」
- ℓ. 27 ◇ make a point 「指摘する」

**[3]**

**ポイント**

形容詞を用いた熟語表現を用いて英作文を作ってみよう。形容詞と共に用いられる前置詞については出来る限り覚えてしまうこと。また、形容詞の語順については一般にどのような規則があるのか確認しておこう。

**解答・解説**

- (1) He is quite indifferent to the latest fashion.  
○ be indifferent to ~ 「～に無関心な」
- (2) She is very particular about her appearance.  
○ be particular about ~ 「～の好みにはうるさい」
- (3) In the country, more than one million are short of food.  
○ be short of ~ 「～が不足して」
- (4) Mary is difficult to get along with.  
○ get along with ~ 「～とうまくやる」
- (5) Both (of) the two beautiful young women came from Spain.

**別解** The two beautiful young women both came from Spain.

○形容詞の語順に注意する。一般には‘all [both] + 冠詞 or 所有格 or 指示形容詞 + 数量形容詞 + 性質形容詞（性状・大小・形+新旧・老若+所属・材料）+ 名詞’という順番になるとされる。ただ、性質形容詞の順番については主觀によるところも大きい。beautiful と young の語順は場合によっては逆になりうる。



## 整理しよう

### 前置詞のマスター6 “through”

#### 解答・解説

- (1) I met Jack through a mutual friend of ours.  
○ mutual 「互いの；共通の」
- (2) I'm halfway through this study guide.  
○ be halfway through ~ 「~を半分終わらせた」
- (3) The main reason why cells die is through lack of oxygen.  
○ 「細胞が死ぬ主な原因は」と読み替える。through は「原因」を表すことがある。
- (4) Then a strong pain shot through my right arm.  
○ 「痛みが走る」は shoot through ~ という表現がある。
- (5) I go to school from Monday through Friday.  
○ until Friday だと「金曜日を含まない」可能性もあるため through を用いたほうが無難である。

### 前置詞のマスター7 “on”

- (1) on the cheek (= He kissed the baby's cheek.)  
○ ‘動詞 + 人 + 前置詞 + the + 場所’となる一連の形式がある。  
He grabbed me by the arm. 「腕をつかんだ」  
He pulled me by the sleeve 「袖を引っ張った」  
He patted me on the shoulder. 「肩を叩いた」
- (2) on (the/their) pension  
○ live on A 「Aに基づいて（頼って；常食として）生きる」
- (3) on this question  
○ have no bearing on A 「Aとは関係ない」この意味の bearing は重要。
- (4) on a cold morning  
○ 「午前中に」は “in the morning” と言うが、形容詞等の修飾語が付いて具体化された特定の午前中を表すときの前置詞は on になる。
- (5) on sale  
○ put A on sale 「Aを売りに出す」 on sale だけで「セール中」の意味もある。

## 【4】

A.

#### ポイント

名詞を修飾する語句を形容詞と呼ぶが、これにはさまざまな種類・用法がある。ここで代表的な形容詞について概観してみる。

#### 解答・解説

- (1) the three tall boys  
「あそこにいる3人の背の高い少年は誰ですか。」

- 名詞を修飾する形容詞の順番は、一般に「冠詞（冠詞相当語） + 数量形容詞 + 性状形容詞 + 形容詞用法の名詞 + 名詞」の順になる。

e.g. these four beautiful fashion models

(2) The first five days

「旅の始めの 5 日間は曇だった。」

- 序数詞と数詞の語順は、序数詞が先となる。

(3) Two thirds

「アメリカ人の 3 分の 2 は太りすぎだと言われている。」

- 「3 分の 1」は one third であるが、「3 分の 2」は two thirds と複数形になる。

(4) forty thousand

「約 4 万人の人々がスタジアムで決勝戦を楽しんだ。」

- 40 は forty ではなく forty。単位を表す場合、thousand や hundred, million などはすべて単数形で記す。これらが複数形になるのは、thousands of ~ (何千もの~) のような場合に限られる。

(5) The boy was afraid and burst into tears.

「その少年は怖くなって突然泣き出した。」

- 形容詞には名詞を直接修飾する限定用法と補語として働く叙述用法がある。afraid は限定用法では用いず、もっぱら叙述用法で使用される形容詞である。

(6) The rich are

「金持ちがいつも幸せとは限らない。」

- 'the + 形容詞' は、「～な人々」という意味を表すことがあるが、その場合は複数扱いとなるので、The rich are not always happy. = Rich people are not always happy. となる。なお、the rich people と言うと「特定された金持ちの人たち」を指す。また、not always は部分否定で「常に～というわけではない」の意味となる（詳細は‘否定’の回で扱う）。

(7) quite a few

「私の先生はかなり多くの文法ミスを見つけた。」

- little は不可算名詞を形容する一方で few は可算名詞を修飾する。
- quite a few = not a few 「かなり多くの（可算）」
- quite a little = not a little 「かなり大量の（不可算）」

(8) made little progress

「彼は懸命に勉強したが、ほとんど進歩がなかった。」

- progress は（特定している場合を除き）不可算名詞として扱うのが普通。不可算名詞を修飾する形容詞として、a little は「少しある」という意味で肯定的だが、little は「ほとんどない」という意味で否定的になる。

(9) Much of the furniture has

「その家具の多くがアンティークとしての価値がある。」

- furniture は不可算名詞の代表格であり複数形にはしない。そのため可算的な many ではなく much にして、かつ動詞も has に直す。不可算名詞として重要なものは他に、

advice, information などがある。

(10) We had (a) little rain this summer.

「この夏はほとんど雨が降らなかった（少しの雨が降った）。」

○ rain は不可算名詞のため、形容するには a few ではなく little か a little にする。

B.

**ポイント**

形容詞には、名詞に直接付けて用いる「限定用法」と、補語として働く「叙述用法」の2用法がある。形容詞の中には、限定用法のみで用いるものや、叙述用法のみで使うものがある。また、be sure of …ing と be sure to do の相違や be afraid of …ing と be afraid to do の相違には注意すること。

**解答・解説**

(a) I am / Thomas 「トーマスはきっとアカデミー賞を獲るだろう。」

○ be sure to do は「話者の確信」を表す。

○ Oscar 「オスカー；アカデミー賞」

(b) Thomas is / he 「トーマスはアカデミー賞を獲るのを確信している。」

○ be sure of …ing は「主語の確信」を表す。

C.

**解答・解説**

alone は叙述用法として用いる形容詞である。つまり、He is an alone person. という使い方はしない。他の形容詞は、もっぱら限定用法で用いる。

D.

**解答・解説**

atomic は限定用法として用いる形容詞である。つまり、This age is atomic. という言い方は原則としてしない。他の形容詞は、もっぱら叙述用法で用いる。

**【5】**

**ポイント**

同じ語が形容詞だけでなく他の品詞としても使われる場合がある。また、限定用法と叙述用法で意味が異なる形容詞があるので注意しておく。

**解答・解説**

(1) still

(a) 形容詞 still 「じっとした」。「写真を撮る間はじっとしていなさい。」

(b) 副詞 still 「いまだ、依然として」。「彼がまだ私を見ていることに気がついた。」

(c) 形容詞 still 「静止した」。「デジタルスチルカメラは静止画像を撮るためのものだ。」

(2) present

(a) 形容詞（限定用法）の present は「現在の」の意味。「現在の日本国憲法は 1947 年に施行された。」

(b) 形容詞（叙述用法）の present は「存在した」の意味。「居合わせた人達が何をしゃべっているのか理解できなかった。」

(c) 動詞の present は「～を提示する；発表する」の意味。「本当の和食、つまり日本食を紹介したかったのです。」

(3) certain

(a) 形容詞（限定用法）の certain は「ある；一定の」の意味。「あなた方は皆、一定の目標を達成しなければなりません。」

(b) 形容詞（叙述用法）の certain は、be certain to do の形で「きっと…する」の意味。「誰にでも必ず死は訪れる。」

(4) late

(a) 形容詞（限定用法）の late は「故～」の意味。「故スミス氏は偉大な俳優だった。」

○ apace 「速やかに；同じペースで」

(b) 形容詞（叙述用法）の ill は「病気で」の意味。「現在も病気で床に伏しているとのこと、残念です。」

(c) 副詞の ill は「悪く；不十分に」の意味。「人前だといつも落ち着かない。」

○ at ease 「落ち着いて」 ⇔ ill at ease 「落ち着かない」

**[6]**

**ポイント**

語幹の同じ形容詞を覚えることは、受験生として決して避けては通れない。sensitive, sensible などは有名だが、他のものも含めてここでしっかりとまとめて覚えておこう。

**解答・解説**

(1) childish

「なんて子供っぽいのかしら。そろそろ大人になる頃じゃないの？」

○ childlike 「子供のように無邪気な；純真な」, childish 「子供っぽい；幼稚な」

(2) considerable

「東京で新築の家を買うには相当な額のお金が必要だ。」

○ considerate 「思いやりのある」, considerable 「かなりの、相当な」

※ considerable は「考えられる」という意味ではないので注意。

(3) continuous

「降り続く雨で気がおかしくなりそうだ。」

○ continual 「断続的な；頻繁に起こる」, continuous 「継続的な；引き続いた」

(4) imaginary, imaginary

「虚数  $i$  は 0 の実数部と 1 の虚数部を持つ。」

○ imaginative 「想像力豊かな」, imaginary 「想像上の；架空の」, imaginable 「想像しうる」

○ imaginary number 「虚数」 ⇔ real number 「実数」

cf. integer number 「整数」, rational number 「有理数」, irrational number 「無理数」, complex number 「複素数」

(5) respective

「それぞれの家にお帰りください。」

- respectful 「敬意を表した」, respectable 「まともな；見苦しくない」, respective 「それぞれの；各々の」

※ respectable は、「尊敬できる」とまでほめる意味はないので注意。

(6) sensible

「その政治家が賄賂を拒否したのは大変賢明なことだった。」

- sensuous 「感覚に訴える」, sensible 「賢明な；分別のある；五感で感じられる」, sensory 「感覚の」, sensitive 「敏感な；感受性に富んだ」
- bribe 「賄賂」

(7) momentous

「今日は私にとって大変重要な日です。これをする機会をもらえるなんてラッキーですか ら。」

- momentary 「瞬間的な」, momentous 「重大な」

(8) historical

「先生は私たちに、この理論の歴史に基づく説明をしてくれた。」

- historical 「歴史（上）の；史料となる」, historic 「歴史的に重要な」

※ historical の方が適切だが、historic を historical の意味で使うこともあるため、この設問では historic でも完全な間違いとは言えない。

**今日の一言**

A man's mind often gives him warning of evil to come. 「虫の知らせ。」

evil to come の to come は evil を修飾する形容詞句（to 不定詞の形容詞的用法）で、evil は come の主語となるので「主語関係」とする文法書もある（例えば、He is the last person to tell a lie.（彼は嘘をつくような人ではない。）の to tell a lie も person という主語となる名詞を修飾する形容詞句であり同じ用法である）。つまり、「人の心はその人に、これから来るべき害悪の警告を与える」というのが直訳になる。日本語では「虫の知らせ」とも言うが、悪い状況になる場合には直感的に気がつくものなのかもしれない。試験直前に悪い虫の知らせが来ないように、勉強は先延ばしにせず今日できることを今日片付ける気持ちが大切である。

## 添削課題

### 全訳

①ガンがとりうる無限に多様な形態は、医者にも研究員にも必ず強い印象を与える。人間のガンだけでも何百もの種類がある。しかし、本当に注目に値するのは無慈悲に止まることなく成長し続けるというガン共通の特性である。ある時点まで、腫瘍は通常比較的ゆっくりと成長する。ことによると、ある特別な発達過程の最終段階として、多くの腫瘍は劇的な変身を遂げ、独立するようである。②とてつもなく速まったスピードで成長するだけではなく、断片がはがれて、それが生じた組織とは遠く離れた組織の中に定着する。

### 解説

- ① ◇ The endless variety of forms which cancer may take 「ガンがとりうる無限に多様な形態」  
○ 主語になる部分。  
○ endless 「終わりのない；無限の」  
○ variety 「多様性」  
◇ never fail to do 「必ず…する」  
○ fail to do (...しない) を否定することにより肯定の意味を表す。一種の二重否定表現  
◇ make an impression on ~ 「～に印象〔感銘〕を与える」  
◇ either A or B 「① (肯定文で) A か B か ② (否定文で) A も B も」  
◇ physician 「医師；(特に) 内科医」  
◇ investigator 「研究者」
- ② ◇ not only A but (also) B 「Aばかりでなく B も」  
◇ at an enormously increased rate 「非常に増加した速度で」  
◇ fragment 「断片」  
◇ break off 「ちぎれる；壊れる」  
◇ establish oneself 「(場所・職業・地位などに) 落ち着く；収まる」  
◇ tissues far removed from the tissues from which they sprang 「それらが生じた組織から遠く離れた組織」  
○ removed 「隔たった」  
○ spring from ~ 「～から生じる」